



石川県立  
金沢北陵高校

基礎学力向上・表現力育成

「北陵+」<sup>プラス</sup>「北陵α」<sup>アルファ</sup>で  
基礎学力の定着と  
表現力の育成を図る

◎石川県立第二工業高校として開校。1994年、県内初の総合学科となり、95年に現校名に改称。2年次から人間科学、福祉・健康科学、生産技術、ビジネスの4系列に分かれる。地域貢献にも力を入れ、保育園や児童館でのミニコンサート、小・中学校での工作教室などを行っている。

設立

1962(昭和37)年

形態

全日制・単位制/総合学科/共学

生徒数

1学年約200人

2015年度入試合格実績(現役のみ)

公立大は、石川県立看護大に2人が合格。私立大は、金沢工業大、金沢星稜大などに延べ19人が合格。

住所

〒920-3114  
石川県金沢市吉原町721番地

電話

076-258-1100

Web Site

<http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~hokurh/NC2/htdocs/>

変革のステップ

背景

◎授業への集中力が欠く生徒や規律を守れない生徒が気になるように。生徒の意欲を引き出す指導を構築する機運が高まった

STEP 1

実践

◎中学校段階の学習内容を学び直す「北陵+」と、新聞記事を学習に取り入れて、考える力や表現力を身に付けさせる「北陵α」を実施

STEP 2

成果

◎意欲的に授業に向き合うようになり、生活態度が規律の取れたものになる。進路実現を意識して行動する生徒が増加

STEP 3

授業に身の入らない生徒たちが  
学校に漂う閉塞感を打破したい

石川県立金沢北陵高校は、1995年度に現校名となり、県内初の総合学科として再出発した。生徒の希望進路は就職から国公立大進学まで幅広いため、教師は生徒の適性や希望に応じた学習指導、進路指導を行う必要がある。更に、生徒自身にも主体的に将来を考え、希望進路を実現しようとする姿勢が求められた。

しかし、数年前から、生徒の学びに向かう姿勢や自ら進路を切り開く主体性を引き出すことが難しい状況に陥っていた。遅刻や、集会での集合・整列が遅いといったことが、気になるようになった。教師の中には、生徒がきちんと授業を理解しているという実感を持っていない者も少なくなかった。また、進路選択では、工業系の生徒が3年次になって美容師を目指し始めるなど、1・2年次で行ってきた進路指導の積み上げが、進路の実現に結び付かないということも珍しくなかった。3年前から進路指導主事を務める中盛邦昭先生は次のように振り返る。

「1年次からライブプランを立てるなどの進路指導を行っていましたが、生徒の進路意識を引き出し、高めることにはつながっていませんでした。生徒は自分に自信がなく、学校生活への目的意識も希薄で、教師も指導に迷う状態が続いていました」

## 10分間の朝学習「北陵+」で 中学校段階の学習内容を学び直し

生徒の学びに向かう姿勢を改善するために、進路指導課が中心となって2011年度に始めたのが、基礎学力向上のための学び直しの時間「北陵+」だ。

「授業中の生徒の様子を見ると、中学校段階の学習内容が身に付いていないために、授業に付いていけないことが分かりました。中学校の学習内容は、高校での学習の基礎となるだけでなく、社会に出た後に、自ら学んでいくための土台となります。まずは、中学校の学習内容を定着させ、「勉強が分かる!」という、自信を付けさせよう」と考



石川県立金沢北陵高校  
**中盛邦昭** なかもり・くにあき  
教職歴27年。同校に赴任して7年目。進路指導  
主事。「生徒にいつも笑顔で接し、褒めて伸ばす」



石川県立金沢北陵高校  
**島洋介** はた・ようすけ  
教職歴25年。同校に赴任して2年目。2学年主任  
「どんな生徒にもある学びの欲求を、どうやって  
引き出し、どう伸ばせばよいかを考える」



石川県立金沢北陵高校  
**別宗由美子** べっそう・ゆみこ  
教職歴17年。同校に赴任して4年目。3学年主任  
「常に周囲への感謝を忘れず、絶対に諦めない  
気持ちで、目標に向かい努力する」

えました」（中盛先生）

「北陵+」では、朝学習の10分間を活用し、1・2年次は数学と英語の学び直しを行う。教材はベネッセの「マナトレ」(\*)で、1年次は標準編、2年次は挑戦編に取り組み。各学年とも、9月まで1日おきに数学と英語に取り組み、10月からは漢字検定に向けた対策や、進学・就職に向けた問題集などの学習に移行する。

13年度の1年次からは、独自の「マナトレテスト」を導入。「マナトレ」の教材を参考に、数学・英語科の教師が各50点満点のテストを作成。9月までに2回、LHRで実施する。答えは担任が集め、学年会全員で採点する。この取り組みを提案した2学年主任の島洋介先生は言う。

「『頑張れ』と言っても、どう努力してよいか分からない生徒は多いです。時には『テスト』という明確な目標を設定し、強制力を持たせることも必要だと考えました。毎朝の取り組みでどれだけ力が付いているのか、生徒自身が実感できる機会にしています」

「マナトレテスト」の事前・事後指導も徹底して行う。テスト2週間前から、「マナトレ」付属の「おかわりプリント」を1日1枚、宿題として課す。そして、各教科20点以下の生徒には、テスト終了後、3日間、放課後のマナトレ補習を課した。補習の指導は、教科を問わず学年会の教師全員で行うのがポイントだという。

「『マナトレ』が使いやすいのは、教科の枠

を超えて指導が出来ることです。学年全体の取り組みとして教師一人ひとりに当事者意識を持ってほしいと考え、全教師で指導に当たることになりました。基礎・基本が定着していない生徒が多いということも、数学科や英語科以外の教師も実感する機会になりました」（中盛先生）

## 新聞コラムの感想を話題に 面談を行う「北陵a」

表現力・読解力の向上を目指す「北陵a」も始めた。年10回（15年度は8回の予定）、金曜の終礼前25分間で、新聞のコラムを読み、感想を書くという取り組みだ。教材は、進路指導課が選び、難しい用語には解説を併記する。14年度は、北陸新幹線開通や金沢市内の飲食店で起きた事件など、生徒に身近な話題を取り上げた。

「北陵a」の最大の特徴は、ただ書かせるだけでなく、生徒の感想を基に教師と面談を行う点だ。この「アルファ面談」は、7月、10月、1月の年3回（15年度は7・1月の2回の予定）実施する。面談は全教師が担当。生徒が、日頃接することのない教師と話が出来るように、毎回違う組み合わせで面談をする。14年度では、教師1人当たり約10人の生徒を担当した。

「就職試験や入試の面接をにらみ、初対面の人もコミュニケーションが取れる力を育

\*ベネッセの教材の1つ。学習力を身に付ける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

みたいと思っています。教師によって質問の内容や考え方も変わるので、生徒の表現力もより豊かになると考えました」（中盛先生）

教師は事前に担当する生徒の書いた3〜4回分の感想文を読み、面談では記事を読んでどう思ったのか、感想文でどこを工夫したのかといった質問をする。面談時間は約5分。教師は聞き役に徹し、生徒が考えを述べる時間を十分に確保する。1年次での最初の面談では口ごもる生徒も多いが、回を重ねるごとに記事の主張を踏まえて意見を表明できるようになる。また、敬語をきちんと使えるようになるなど、規律面においても格段に成長するという。

## 教師との「アルファ面談」で「コミュニケーション力」の向上を図る

「アルファ面談」をより効果的に行う工夫の1つが、「面談カード」(図)の活用だ。これは、教師のアドバイスや生徒の「聞く・話す・考える」意欲について、教師が記録するカルテの役割を果たす。生徒は、面談後にこのカードを見て、振り返りを行い、次の「北陵α」や面談に向けての対策を立てていく。

「面談カード」を通して、生

図 「北陵α」で使う「面談カード」

2015 北陵α 面談カード

目標：プリント全通して「考える力」を、面談を通して「話す力」を養い、成長を促す。

※面談は、事前に面談カードと筆記用具を持参してください。開始時間をやりましょう。

※面談は、必ず先生と向き合って行います。(原則として)

※面談カードは、面談後必ず回収し、プリントは各自のファイルボックスに入れてください。

※面談カードの活用は、先生に許可を受けてください。また、面談カードを回収し、回収した面談カードは、先生に提出してください。

回	面談日時	観点(〇を)
1回 7月27日	月 日 ( 曜 ) 時 分 担任者【 】 運動場【 】	聞く態度(よい・もう少し) 話す態度(よい・もう少し) 考える態度(よい・もう少し)
2回 8月20日	月 日 ( 曜 ) 時 分 担任者【 】 運動場【 】	聞く態度(よい・もう少し) 話す態度(よい・もう少し) 考える態度(よい・もう少し)

【このカードを振り返り、自分の学びや成長を振り返ってください。】

ホーム番 氏名

\*学校資料をそのまま掲載

徒の成長を実感する教師も多い。3学年主任の別宗由美子先生は次のように語る。

「面談後に生徒と話すと、全く印象が変わっていることがあります。『面談カード』を読み、社会に出たらどのような力が求められるのか、自分には何が足りないのかを真剣に受け止め成長しているのだと思います。面談を重ねていくうちに、生徒が楽しみながら学んでいることを感じられました」

「アルファ面談」は、「北陵α」での学びを更に深める場にもなる。畠先生は、生徒が書いた感想に質問を書いて渡し、答えられそうなものを1つ選んで事前に調べさせ、面談で簡単な口頭試問を行っている。例えば、T P P (環太平洋戦略的経済連携協定) を選んだ生徒には、T P Pとは何か、次に何が起ると予想されるか、それによって世の中がどう変わるかといった質

問をし、「生きた知識」として定着させる。

「生徒は、予想以上にきちんと準備をしてから面談に臨んでいました。『生徒の力はこの程度だろう』と、教師が生徒の限界を決めつけるべきではないと改めて実感しました。知識が身に付き、生徒の視野が広がっていると手応えを感じています」(畠先生)

## 独自の「語彙プリント」で社会への視野を広げる

基礎学力の定着と表現力の向上に加え、生徒の視野を広げる取り組みにも力を入れる。

15年度、2年次の「北陵+」では、学校独自の「語彙プリント」を実施することとした。ベネッセ・朝日新聞社共催「語彙・読解力検定」を参考に、語彙力を育てる独自の学習プリントを学年会で作成している。この取り組みでは、「グローバル化」「パラリンピック」「ゆるキャラ」など、新聞やインターネットでよく目にする語句について学ぶ。説明文を読み、選択肢から正解だと思ふ語句を選び、答え合わせをする。そして、間違えた言葉の説明文を書き写す。

「言葉を知らなければ小論文や面接でつまずくのはもちろん、新聞やニュースも理解できません。まずは社会でよく用いられる言葉を理解することで、社会とつながる力を身に付けてほしいと考えました」(畠先生)

「語彙・読解力検定」挑戦に向けて、自主的に学習する生徒も増えた。進学希望の生徒にも、就職希望者に負けないよう、今後は積極的に受検を促していく予定だ。

また、15年度の2年次には、就職希望者を対象に、放課後の「就職補習」を実施予定だ。体育科、工業科、商業科などの教師が講師を務め、SPIなどの就職対策の他、新聞記事を基にディベートなどを行う。「インターネットのニュースに書いてあった」「こんな主張の書籍を読んだ」など、生徒と教師が意見を述べ合い、「答えない問い」について考えていく。

「たとえ世間話で終わつたとしても、友達や教師と一緒に社会情勢や社会問題について語り合う経験は、決して無駄にはなりません。新たな視点を得たり、コミュニケーション能力を高めたりすることで、就職試験でもアピールでき、社会で生き抜いていける力を身に付けられると期待しています」（畠先生）

## 生徒にもGTZを意識させ 更なる学力向上を目指す

ここ3年間の生徒の成長は著しい。時間を守るようになり、授業もきちんと顔を上げて聞くようになった。教師との接し方も、以前は友達口調だったのが、今では礼儀正しく、敬語も使えるようになった。

### 総合学科で求められる指導とは？

#### 進学・就職の両面で 満足度の高い指導を目指す

2学年主任 畠 洋介

本校に赴任して感じたのは、生徒の自己肯定感の低さです。普段の雑談では、「こんなに面白いことが言えるのか」と驚くことがあるのに、自分のことを語らせたら、否定的な言葉しか出てきませんでした。自分に自信が持てないから、将来に対する希望も抱けない。そして、自分の考えを述べることにためらいを感じてしまう……。自己肯定感を高め、本来の彼らの良さを引き出すためにはどうすればよいのか、日々考えながら指導に取り組んでいます。

本校の生徒の希望進路は、就職から国公立大進学まで多様です。進学については、放課後補習など学力を伸ばす機会やノウハウがあり、偏差値など学力を測る指標もあります。一方で、就職については、それがありません。2年次で就職補習を始めようとしているのは、就職を目指す生徒に対しても、潜在能力を引き出す指導をしていかなければならないという思いがあったからです。

今後は、就職指導の精度を高めるために、就職試験の合否とGTZの相関を測るデータの収集・作成を検討しています。データが蓄積されれば、「A社ならBゾーン以上への到達が必要」など、大学入試の合否判定予測を行うように就職指導の精度も高まるはずだ。

就職も進学も学年全体で指導に取り組み、生徒一人ひとりの希望進路を実現することが、これからの総合学科にはますます必要になるのではないのでしょうか。

「進路を意識して行動する生徒が多くなりました。『北陵a』や教師との面談で視野を広げ、社会や大人を認識するようになり、自分の将来を真剣に考えるようになってきています」（別宗先生）

教師の意識も変わった。当初、教師全員参加が基本の「北陵+」「北陵a」に疑問を呈する声もあったが、生徒が変わっていくに連れて、教師全員が積極的に取り組むようになった。更に、新たな活動が提案されることもあるという。教師がベクトルをそろえて指導に当たることで、効果は更に高まると実感している。

今後の課題は一層の学力の向上だ。ベネッセの「実力診断テスト」を活用し、GTZ（\*）

を目安にした指導に力を入れている。生徒全員がCゾーン以上への到達を目標に、ゾーン別の一覧表や過年度との比較などのデータを教師間で共有し、生徒にも意識させている。

10年後を見据えた「ビジョン委員会」も動き始めた。各分掌の主任で構成する組織で、教科学習や資格取得のための学び、進路指導、行事などあらゆる取り組みの見直しを進めている。

「少子化の中、金沢市内の学校だからと慢心しては、統廃合の対象になるかもしれない。行きたい学校・行かせたい学校と、地域から選ばれ続けるために、生徒の学力・進路を保証し、生徒・保護者の満足度を高める改革を推進していきます」（中盛先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2012年4月号指導変革の軌跡「宮城県黒川高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け